

報 告

令和5年度 全国高等学校総合体育大会・ ソフトボール競技大会のアンチ・ドーピング 教育啓発活動(アウトリーチ)活動報告！

アンチ・ドーピング特別委員会

委員長 門 間 康 成

アンチ・ドーピング特別委員会では(公財)日本ソフトボール協会より依頼を受け、令和5年度全国高等学校総合体育大会・ソフトボール競技大会で、選手、サポートスタッフ、保護者の皆様等、約800名の方へアンチ・ドーピング教育啓発活動(アウトリーチ)を行いました。今回の活動にあたり、北海道薬剤師会会員の公認スポーツファーマシスト(SP)へ募集を行い14名の方が参加されました。参加された方の感想と活動風景をお届けします。

令和5年度全国高等学校総合体育大会

翔び立て若き翼 北海道総体 2023

～轟かせ 魂の鼓動 北の大地へ大空へ～

場所：はまなす国体記念石狩市スポーツ広場

女子大会：7月29日(土)、7月30日(日)

男子大会：8月5日(土)、8月6日(日)

- OSPとして研修はしていても、実際に活かせる活動に携わる機会がなかったので、啓発活動に参加できたことは良い経験になった。
- 全くアンチ・ドーピングに関心のなかった方々に興味をもってもらえたことがとても嬉しく思う。
- 声掛けした反応からも、この活動がスポーツの価値を高め、選手の身体づくり、健康に役立つ

ことを改めて実感できた。参加したSPと協力して活動できたことは良かった。今後も自己研鑽をしながら、このような活動に取り組んでいきたいと思う。

- 認知度の向上が課題と感じた。SP認証カードを提示するだけでは足りないと感じたので、一目でSPと分かる上着などがあると活動しやすい。このような機会が増えると多くの人にアンチ・ドーピングが認識されて良いと思う。
- 選手のアンチ・ドーピングへの意識はあまり高いようには思わなかったが、保護者の方は国体なども見据えて関心が高いように感じた。
- アンチ・ドーピングに関して既に学習している学校もあったが、まだされていない学校もあった。そのような学校にもっと啓発していくべきだと思った。
- 参加選手に服用している薬やサプリメント、プロテインなどを聞くと、摂取しているという人が少ないように感じた。ドーピングが起きてからでは遅いので、事前に知識を付けておく大切さを感じた。アンチ・ドーピング自体に対する理解は高いが、意図しないドーピングへの意識は保護者に関しても薄いと感じた。
- 選手の母親層に話ができたのは良かった。同じ年齢層で風邪を引いて症状が出ている時の薬についての話などができて良かったと感じた。





- アンチ・ドーピングについてはなんとなく聞いたことがある人がほとんどだが、何がだめなのかについては知識がないばかりだった。全国大会に応援に来るような熱心な家族であれば、今回の活動でアンチ・ドーピングについての理解も深まると感じた。選手には試合前後の時間だけでは十分な啓蒙は難しかった。
- 実際にドーピングの検査をしなくても、検査するための場所が設けられていると意識は変わってくるのかなと思った。
- いままでSPとして、貢献することができなかったが、今回この様な活動に参加することができ、とても感謝している。会場の雰囲気も感じることができ、他のSPと交流できたことが嬉しかっ

た。また機会があれば参加したい。他のSPも参加したいと考えている方はいると思うので、多くのSPに参加の声掛けをして欲しい。

- 情報共有ができて、これから自分自身でアウトリーチ活動を行う時の参考となった。
- 「前の日に風邪薬飲みました」と言ってる選手がいて、ドーピングの対象になるかもしれないという自覚が無い選手もいた。若いうちから教育が必要だと感じた。

ご参加いただきましたSPの皆様ありがとうございます。次の機会もご協力を宜しく願っています！



アンチ・ドーピング特別委員会 委員 富田 浩 史

大会は女子が48チーム、男子が45チーム参加されていました。女子の日程では猛暑、男子の日程では雨交じりのぐずついた天気でしたが、選手たちは競技に集中していました。

ブースではアンチ・ドーピング広報活動としてアンチ・ドーピング冊子やクリーンスポーツに参加するためのアクションポイントに関する冊子、ポケットティッシュなどを参加者に配布しました。

ドーピングに関してあまり知識がない選手が多かった印象でしたが、中にはすでにアンチ・ドーピングに関する講習を受講している選手もおりました。チームの監督には前もってアンチ・ドーピ





ング特別委員会より説明があることが周知されており、こちらから何うと快く聞いていただきました。また、競技の合間にブースへ立ち寄ってもらったり、ご家族の方にも声をかけると熱心に聞いていただけました。

今回はソフトボール協会と北海道薬剤師会会員のスポーツファーマシストにもご協力いただき、積極的に大会参加者と交流を深めていました。

この大会において、選手たちに活動の意味を伝

えるとともに私たちも選手たちの大会への熱意をいただきました。今後もこのような大会に関わり薬とスポーツの関係について伝える活動を行っていききたいと思います。

配布数一覧

アンチ・ドーピング冊子、チラシ、ティッシュ：877セット



アンチ・ドーピング特別委員会 委員 元井 晴 奈

女子ソフトボール競技大会の初日7月29日、会場のはまなす国体記念石狩市スポーツ広場は朝から気温30度を超える灼熱炎天下でした。大会本部の近くにテントブースを設営し、アンチ・ドーピング冊子やJADAの冊子などを参加者に配布しました。女子ソフトボール北京・東京オリンピック金メダリストの峰幸代選手もブースにきてくれました。

試合前の選手達は緊張している様子でしたので、試合後や当日試合のない選手に「ドーピングって

知ってる？」などと声をかけて選手たちと交流をはかりました。選手からは「毎日アレルギーの薬飲んでるんだけど、この薬大丈夫ですか？」などと質問も飛び交い、選手達は資料をみながら真剣に耳を傾けてました。

「インターハイ出場の選手の中には高校卒業後、実業団入りする選手もいて、何も知らずにうっかりドーピングになってしまうケースもあるのでこのような教育活動はとても重要です」と、(公財)日本ソフトボール協会の方も話していました。

アンチ・ドーピング教育が義務化される今、高校生の頃からこういった機会にアンチ・ドーピングについて考えていただければと思います。

